慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新文学の弁
Sub Title	
Author	馬場, 狐蝶
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.7 (1909. 9) ,p.137(15)- 147(25)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090901-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

脱却しそれ以上に進んでゐる所があるかの殺身爲仁と云ふやうなことは決して功利の爲めの故ではない自然主義では如何に之を理解し評價せやうとするのであるか又一方を見ると勤勞に於いても唯の自我と云ふものが解除されつつある勿論勤勞は生存の維持と密接な關係を有するもので生活に何等か役に立つものでなければならぬのであるが然かし勤勞が其れ自身目的となり功利と云ふやうな念の忘れられて了うに非ずんば大なる事を成し遂げることは出來ぬ而して功利の努力が大なる場所を占めてゐると云はれてゐる近代に於いても其の創造の中心に在つては功利の努力を去ることと遠しと云はざるを得ぬのである科學及び藝術に於いて然り政治的及び經濟的生活に於いてもまた然りである

要するに自然主義は排斥すべきものであるさりとて自然に訴ふることの重要なるを忘れてはならぬ可見的自然なるものは吾人の本質のみならず吾人の生活にも非常な關係を有つて來ることとなつた唯自然主義のやうに自然を解すべからざるのみである　（未完）

新文學の辯

馬場孤蝶

新藝術の根據は、大體に於て、既に説明し盡くされ、新藝術の、少くとも傾向を表現せる作品の、見るに足るべきもの、既に世に現はれたること少なからざるに拘はらず、尙、近時の文學は、不健全の文學、墮落の文學なるが故に、排けざるべからずと唱ふる聲の、一部人士の間に聞ゆるは、甚だ遺憾なることなり。　思ふに、斯の如き人士は、古き文學、卽ち、吾人と境遇及び思想を異にせる人々が、吾人と境遇及び思想を異にせる人々に訴へんが爲に作りたる文學を標準とし本據として、現代文學を批判せんとするものなるべし。　されば、吾人にして、假りにさる人々と同立脚地に身を措き、以て、之を考ふる時は、その所説に一應の同情を表するは敢て至難ならずと雖も、さる人々が、文學とは斯の如くならざるべからず、卽ち、文學は、如何なる時代に於ても、必らず前代の文學的思想及び傾向を全然繼承せざるべからずとの見地に立ち

て、如上の說をなせるものとせば、吾人は、さる見解に對しては、大に異議無くんばあらざるなり。

吾人は、さる人士に先づ問はむ。諸君は、疑も無く、諸般の學術工業等が、文明の進歩に伴なひ、次第に進歩し行くを認めらるゝならんに、人間の思想のみは、少しも進まず、少くとも少しも變化せざるものとなすか。若し、人間の思想にして、時代を逐うて進むものとなすを得べくんば、今日も尙、その進歩の道程にあるものと見做すを穩當とす。徒らに、過去を過去をと遡り行かんには、全く際限無きことなるべく、吾人は、遂に、記錄に殘れる最古の文學以外のものは、悉くこれを排けざるべからざるに至るべし。否、或は、左までならずとするも、希臘、羅馬の古文學のみを以て、滿足せざるべからざるに至るべきなり。こは、餘まりに偏狹なる思想にはあらざるか。然るに、若し、諸君の所懷は、希臘、羅馬以後の或る時代の文學若くは或る作家を特に指擧して以てこれを標準とするにありとせば、そは、文學に於ても何等かの進歩若くは變化を容認せることとなるを以て、吾人は、諸君に對し、何ぞ今一歩を進めて、現代の文學も亦文學進歩史上相當の位置を占め得べきものなることを容認せざると勸告せむと欲す。

吾人人類は、同時代の者と雖も、悉く皆、同一の感情の度を有し、同一の經驗を有するものにあらず。隨つて、吾人は、各人その思想に於て多少相異るところ無かるべからず。而るに、現代文學を呪咀する人士は、單に、自家の決して廣かるまじく見ゆる識見或は思想を本據として、自家の所好にのみ偏して、褒貶の意見を發表せらるるが如くなり。是れ、吾人に取りては、極めて迷惑のことたらずんばあらず。吾人は、藝術の諸主義は皆均等の權利を有するものなるを認むるに吝ならざれども、吾人自身は、現代人にして、現代的思想を有するものなるが故に、現代思想の最も顯著に現はれたる現代文學を喜び迎ふるは、自然の理ならずや。現代の文學は、決して、種子無くして生じたる草木にはあらず。過去の文明、過去の思想を根抵として、時代を逐ひて、此に至りたるものなり。されば、現代に至るまでの文明の趨勢、思想の潮流を理解し得る人士ならんには、現代文學の存在理由は、少くとも認め得られざる理由無かるべきなり。

現代文學を排する人士の目的恐らくは、所謂中正趣味、中正道念の皷吹にあらん

か。即ち、中正の趣味、中正の道念に反するものを、不健全とし、墮落せるものと爲し、現代文學はかゝる反中正の趣味かゝる反中正の道念を表現するものなるが故に、極力之を排すべしといふにあらんか。然れども、試に思へ、中正の趣味、中正の道念とは、何を以て定むべきか。全體の上よりして、之を見んか、斯る中正趣味、中正道念は、時代に依り場合に從ひ、多くの異動あるものなり。こは歷史上容易に證明せられ得べきことならずや。固より、吾人は、眞個に萬代を貫く中正趣味、中正道念の嚴たる存在を否むものには非ざれども、斯る趣味及び道念は、共通の性質を有するものにして、全く根抵的のものなるが故に、決して、各時代の文學の諸主義若くは色彩に、一見して明確なるが如き特異の影響を及ぼすものに非ず。即ち、斯る萬代的趣味及び道念は、大抵、中流の教育ある人士は、之を有するものにして、如何なる場合を問はず、吾人の思想の根抵に於ては横はるものなれども、その外間に現はれて、吾人をして活動せしむる際にありては、萬人一樣なる方向若くは色調を帶びしむるものには非ざるなり。これ、吾人は、斯かる原始的の道念及び趣味のみに因りては生き得られざるものにして、必らず、時代、境遇、氣分等の比較上一時的なるものの影響を受けざるべからざるものなればなり。此の故に、吾人は、所謂る中正趣味、中正道念の設定は、甚だ困難なることなるのみならず、假りに、これを立て得るとするも、返つて、偏狹なるものに陷るの虞あるを見るなり。

吾人の見る所に依れば、文明の賚賜は、人間をして、內面的に、多樣ならしめ、能ふ限り、個人に少くとも思索の自由を容るすにあり。複雜なる社會現象を以て刺戟され、個人として刻々解決せざるべからざる多種の問題の眼前に蝟集し來る間に立たしめられ、而も尙、個想を有し個性を發揮するを容るされずとせば、所謂る文明の利澤なるもの、吾人と何の係りあらむや。教育の目的は、吾人を强て平凡化し去らんとするにはあらず。必らずや、個性を築き、個想を造くる基礎を据ゑる爲ならざる可からざるなり。故に、斯かる文明の進步、教育の結果に從ひ、各人の個性はますますその特調を明にするを正當となすを以て、斯く發展し來る特異の個性の發現なる一切の藝術が、種々なる特異の色調を帶び來たるは、毫も背理に非ず。異彩ある文學の出現何ぞ危ぶむに足らんや。

個想の發現を容るすに非ずんば、いかで、世運の興隆を期し得む。現實の世界に

於てすら、物質的の事業及び之と直接關係を有する事業に繫かる發明及び改良の如きは、悉く皆、人間の個性及び個想發展の結果ならずや。まして、假象の世界に活動を求むる藝術、就中、文學にありては、各人の個性、個想の飽くまで自由なる發動を容るすも、何の危險かあらむ。寧ろ、斯かる發動を容るすを以て正道とすべきなり。否々、斯かる發動を抑壓せんとする危險は返つて云ふべからざるものあるなり。藝術は、吾人の胸底に燃ゆる活火に對する噴火口にして安全瓣なり。斯かる噴火口を塞ぎ、斯かる安全瓣を封じ、以て、活火熄み、噴煙全く絶えたりと安んずるものあらば、その人や、全く、導火線に點火せる爆烈彈上に知らずして坐する者と何の擇ぶ所ぞ。而かも、如何なる思想なりとも、如何なる主義なりとも、その取られて藝術の盤上に盛らるゝに當りては、それ等の思想及び主義が單に實行の問題として提出せらるゝ時よりは、その公衆に與ふる感動、夏に間接にして、又比較的平穩なるものなり。爲政者は、藝術の自由を容認するを得策とす。

凡そ、或る時代の宗教及び道德は、その根底たる永遠の分子を包むに、その時代限りの必要を充たさんが爲に生じたる分子を以てしたるものなり。而して、その時代は過ぎ、その必要は止むと雖も、前代の宗教、前代の道德のうちに含まれたる一時代的分子は、直ちに辭去し去るものには非ずして、その一たび得たる權威は、尙、その惰勢に因りて殘存するものなり。斯の如き場合にありて、前代より引續きて生存せる人々は更にも云はず、他人の心を以て思考し、他人の眼を以て觀察すると云ふが如き、獨立の思想無く、獨立の眼識無き人々は、朽腐に近き宗教及び道德に、何等の疑念を挾むこと無く、これを容認して怪むところ無かるべしと雖も、獨立の思想、獨立の眼識に加ふるに、物の弊所の何處にあるかを確むるに先だちその存在を感得するといふが如き極めて鋭敏なる感覺力を備ふる人々にありては、その胸裡に生ずるものは、懷疑と煩悶なり。人は、皆、斯の如き懷疑と煩悶より發程して、解決の大路に向ふものなりとす。卽ち、斯かる懷疑と煩悶は、個性發展の結果なると同時に、又、個性の發動に缺くべからざる動力なり。個人の胸裡に、斯の如き懷疑と煩悶の生じ來ること無くんば、不用の制度の破壞さること到底あるべからず、舊態の思想の更めらるゝこと常久にあらざるべきなり。故に、社會の進歩の速ならんを欲せば、斯の如き懷疑と煩悶を排くべからざるは論無き所なり。然るに、直覺を基礎と

し、感覺を根據とする藝術なるものが、一時代の弊所の存在に感觸すべきは自然の理なるを以て、宛然、地上に棲息する動物が逸早く地震を感ずるが如く、人世の根柢と常に接觸を保つべき藝術の裡に、社會の最も進歩せる部分の懷疑、煩悶、不滿等の影の、他に先だつて、現はれ來るは、何ぞ怪むに足らむ。斯の如き藝術こそ世上の味者が、不健全若くは危險なるものとして、排けんと試むるものなれ。吾人、いかで、斯かる短見に聽くを得んや。

あらゆる改革事業は、その實行の計畫の成るに先だち、先づ個人の胸裡に夢想せらるゝを常とす。新しき思想、新しき進歩の企畫が、空想の世界、卽ち、藝術界よりして生れ來ることあるは、全く之が爲ならずや。されば、吾人に若し、斯の空想の自由の容るさるゝ無く、空想表現の途全く塞がるゝに至らんか、世運は決して進捗することあるべからず。空想の世界に於ては飽くまで空想の跳梁を容るさざるべからざるなり。然るに、現代文學の非難者の多くは、既に過ぎ去りたる時代の中正の趣味及び道念を尺度とし、以て現代文學を批判せんとするが如し。難いかな、その肯綮に中るを期せんは。或は又其れ等の人々の規矩とする所は、眞正の現代的中正の趣味及道念なりとするも、尙、いかんぞ、之を以て、來るべき時代の影を映さんとする藝術中の部分をば、公平に批判し得べけんや。

凡そ、一時代の藝術には、三階級あり。その第一は、その時代に後れたる人々に對するもの、その第二は、その時代相當の人々に對するもの、その第三は、尙その時代を超えて進まんとする人々に對するもの、卽ち是なり。而して、第一及び第二の種類の藝術が、最も廣く公衆に訴ふるものなるを以て、吾人は、斯の如き藝術を有せば、第三種の藝術を有する必要更に無かるべきものならんと唱ふるもの無きにしもあらざるべしと雖も、吾人にして、若し、第三種の藝術の製作に力を注ぐ所あるに非ざれば、決して、第一及第二種の作物に於ても、見るに足るべきものを得ること能はざるなり。諸般の制度を革新すべき時機に際せる邦國にありては、その國の知識を代表せる人々は、藝術作家としても、又、鑑賞者としても、悉く、第三種の藝術の領域に突入するを、自然とす。卽ち、斯の如くにして、吾人は、先づ、力ある藝術の根柢を握り、更に飜つて、廣き世上の要求を充たすべき藝術を產むの素地を作くるの順序に出づるを正當とす。而して、我邦に於ては、現代の新藝術は、他の一般的藝術に對して

機關車の用を爲すものなり。機關車にして強からずんば、いかで、一般車輛の運轉を期し得んや。年少の人士、卽ち新知識、新光明に憬憧する人々が、斯の如き機關車の完成に熱中するは、決して、奇怪なる現象にはあらざるべし。

わが邦の如き、極めて急迅なる進歩を爲さざるべからざる邦にありては、大抵、十年を以て一代を畫すべき場合少なからざるのみならず、甚しきは、五年を以て一代を畫すべきことすらあり。而かも、わが邦に於て謂ふに足るべきの根據を有せざりし藝術特に文學にありては、僅少の年月の差が、その思想及び技巧の上に甚大の差違を齎らすを常とす。卽ち、二十年以前の人々が、藝術上に人間の不德を描きたる氣分と、現代の人々が、同樣の事件を描く氣分とは、その差正に霄壤ともいふべし。現代の人々は、極めて眞摯なる道念に基づきて、所謂る不潔、所謂る不健全なる思想をも取り扱ふに至りたるなり。尙且、現代の文學が、專ら、煩瑣なる事件、平凡なる人物を取り扱ふが如きは、全く新思想の發現に基づくところ、吾人が、この生に於ける立脚點を明にせるものなり。卽ち、この生をば凡て意義あるものと見んとする努力の結果に他ならざるなり。

奇蹟の世は過ぎたり。英雄の時代は去れり。吾人にして、若し、この平凡の世、倦怠の生に、何等かの意義を見出すに非ずんば、吾人生存の根據嗚呼何處にかこれを求めん。